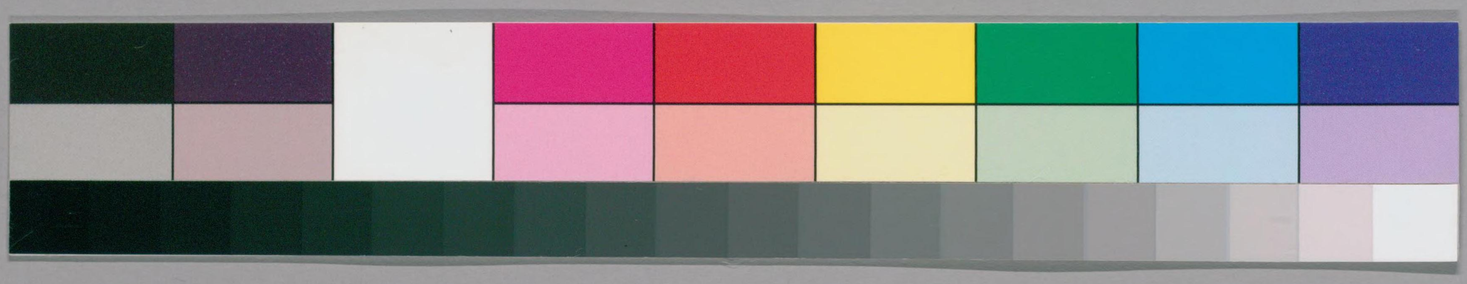

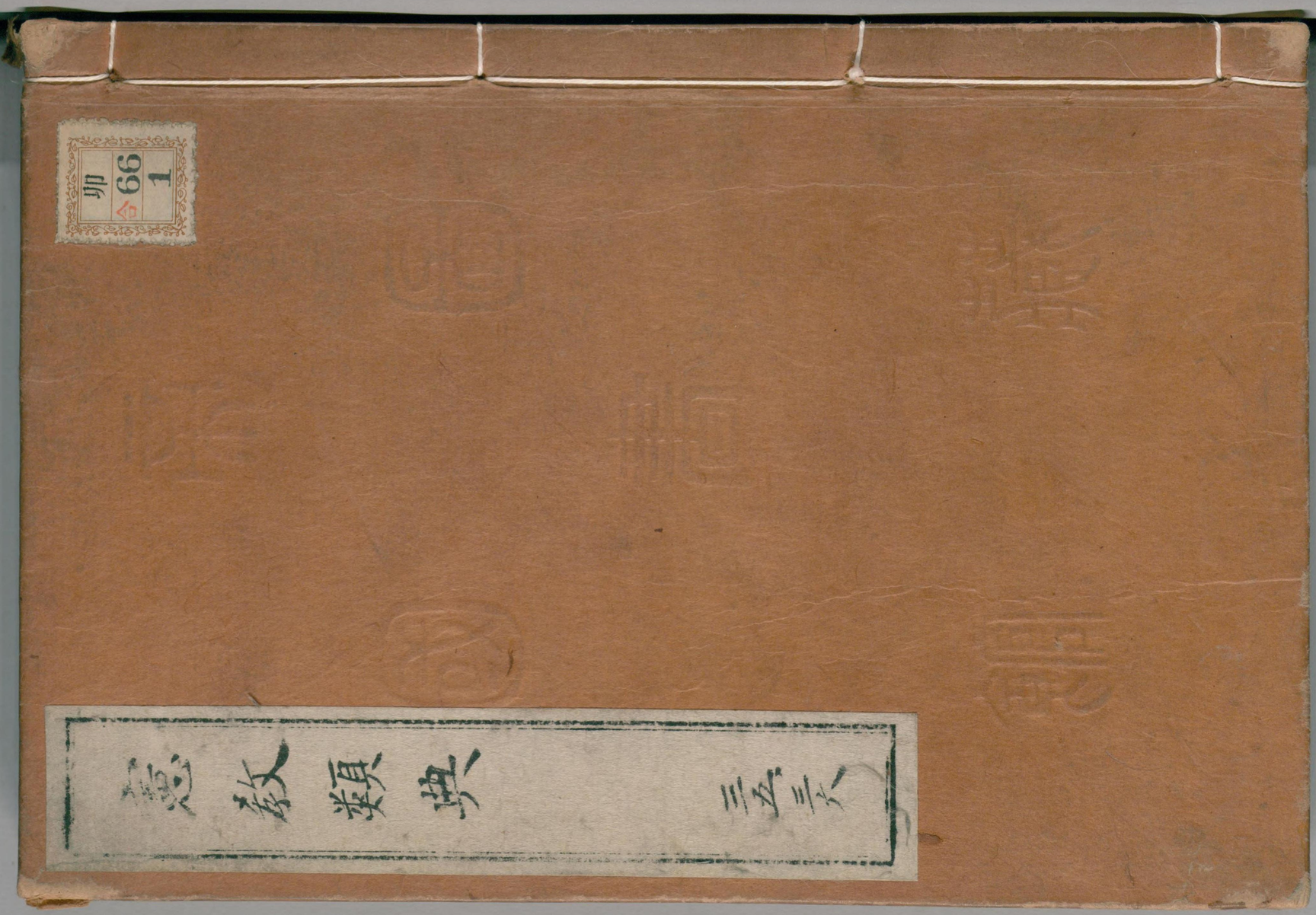

卯
合66
1

ガラス使用
国立国会図書館　タイトル『憲教類典』　請求記号　卯-1

憲教類典

二ノ廿三

朝鮮人

卯
115
1

東京圖書館

門	類	函	架	號	冊
		卯		一	二二五

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』　請求記号 卯-1

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』　請求記号 卯-1

ガラス使用

No.1108/23

明暦元乙未年十月

朝鮮人来朝人数之覚

東京圖書館藏

三使　三人　但　正使　副使　従事官

上々官　二人　讀説官　一員

判事官　三人　上官　廿九人

次官　十六人　中官　百四拾五人

下官　弐百七拾四人

長老　合四百八拾人
是ハ長老
相除ヘ

上下　百人

二ノ廿三 朝鮮人

東京圖書館 明治一七 二三

通詞　大通詞　小通詞　上下百人
諸役人　四拾人
都合七百廿八人
於内証乞不出島乙名共
右人数於江戸拝領有之分
八ヶ国之（朱）用ノ

一 白米拾九石四斗四升
一 味噌六石

一 塩三石　　一 醤油三石六斗
一 酢三石六升　　一 油七升
一 酒八石　　一 雁十
一 鶏百　　一 [illegible]四斗
一 鴨百　　一 鯛四十
一 せいと四百　　一 こふ五斗
一 鰒四十　　一 鰹節千
一 鮭十　　一 うるめ五百
一 鮑二百

一 たはこ四百
一 冬瓜百
一 ねぎ百把
一 菜百五拾把
一 大根二千本
一 ちしや百把
一 里芋五斗
一 松茸百本
一 とうふ五百丁
一 からし壱斗
一 けし五斗
一 こしやう五斤
一 ぶとう三百房
一 白砂糖五斤
一 羊羹五千箇
一 かうへひ二斤
一 あらめ三千
一 らくかん五千斤

一 外郎餅百
此外唐國之下
九拾人へまかるし
同様朝鮮國よりも屏風
廿双差
一 富士三保清見寺 一双 法眼探幽筆
一 宇治川之きの也 一双 同人筆
一 極楽之太かし 一双 古法筆
一 吉野并近江八景 一双 同人筆

一 源氏　一双　右近筆
一 古歌　一双　梅田清正筆
一 篠原合戦　一双　同人筆
一 源氏　一双　同人筆
一 竹ニ鶴　一双　同人筆
一 伊勢物語　一双　同人筆
一 雪ニ松雉子　一双　同人筆
一 源氏　一双　狩野元信筆
一 柳ニ鷺　一双　同人筆
一 松鶴　一双　同人筆
一 碁盤忠信　一双　土佐内記筆
一 那須与市　一双　同人筆
一 和田合戦　一双　同人筆
一 義助三井寺合戦　一双　卓人筆
一 田鶴　一双　同人筆
一 芦鴈　一双　内膳筆
一 右いつれも極彩色金地有り
一 大幅り金織小幅り羽二重絹ハ

紫何れも紅金物等にて縫付
座敷之段御費相定候の如く
さりとも色くし晒布の方にて
二つにて結解か出し黒塗にて
取をめ可申候也
以上
右之條年々も不可被相背者也
今年より

寛文七丁未年七月廿五日
朝鮮人召寄武具之品渡に
出船科之覚
一 死罪之内重科者磔其外或は
獄門或は斬罪
一 武具之品渡候者並送令死罪に
其の死罪様子により金銀之儀
於相違いたささる所に於て
可申候

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』　請求記号　卯-1

ガラス使用

松平安芸守殿

延宝八庚申年六月

今度日本国之主
公方家綱公薨御ニ付御名代
綱吉公御相続被成候ニ付
右例之處　大猷公御昇遐之
御事ニ付御中陰明御中為寄進
公方様之年中御法会能々
海之遠く之所より何候被不
及義御勝手之御謹可

延宝八申年六月

宗対馬守
義真判

礼曹参議

右之宗対馬守より朝鮮江遣候書
如此年々之例之如く朝鮮に

右年々被仰出之趣も此旨諸人之輩
可存者也

天和元辛酉年九月廿三日

覚

廿七年以前朝鮮人来朝之節
従対馬江戸迄海陸通路之
人馬之事也兼而相勤候中国之
面々ニ而無相違事也此度も
相勤候様ニ付難有旨被存候
其外諸事ニ面々之出精相勤
之内ニ茂無相違様ニ可相勤候
以上
右
九月廿三日　延宝九年也

天和二壬戌年三月廿八日

朝鮮人来朝之節御馳走人江
被仰渡之覚

一 信使宿前ニ而者一ケ所ニ付侍
人足十人挑灯十本
宛可差置事

一 附所ニ者当番ニ侍分之者壱両人
宛可差置事

一 諸事之儀者信使ニ付来候宗対馬守家来
承合候而宗対馬守差図次第
万事自分より不存寄様ニ可仕事

一 信使御馳走ニ付而宗対馬守家来
宗対馬守家来信使宿二三里程
先ニ迄罷出信使宿ニ者可致見(?)
様ニと可申事

一 信使宿前ニ而之別所之者ニ(?)
雑人大門の内ニ入不申(?)様ニ可仕事

一 信使宿前之道筋(?)御馳走人ゟ

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』　請求記号 卯-1

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』　請求記号　卯-1

ガラス使用

此旨可守

以上

三月廿八日

天和二壬戌年三月廿八日

給仕覚

一三段之内朝鮮人之小姓残給仕
ハ但馬之内足軽共御徒之人〆し小
姓長袴ニ而勤来ル事

一上之間之内御徒之人〆し小姓長
袴ニ而給仕可仕候其外ハ半袴下
之者羽織袴ニ而給仕之事

以上

三月廿八日

天和二壬戌年三月廿八日

覚

山城　大和　和泉　河内
摂津　近江　丹波　播磨
美濃　三河　遠江　駿河
伊豆　甲斐　武蔵
右之中知行之面々当秋朝
鮮人来朝之節道中人馬之儀
之人馬差出候様可被仰付御代
官私領之百姓可相心得之儀
可被申付候以上

戌六月朔日

天和二壬戌年

一　寺社奉行衆東之方并松平
佐渡守殿東方江出仕一組
一　神田御殿東之方江番請小屋
東方松平周防守殿東方江

一 先手一組組与力同心上下火之番
同心揃而相勤申候

一 朝鮮人通り候ニ付与力同心とも小
路中見廻申候

一 京橋ゟ中橋まで八町堀先手之一組
ニ而相勤申候

一 先手頭ゟ往役通候刻門迄
罷出候

一 頭羽織立付与力同心同前對し
羽織竹杖つき申候 但朝鮮人
通候刻与力同心ともニ路中召
其外鉄炮為持無用ニ候

一 新橋ゟ札辻まで三十二町百人
組一組ニ而相固申候

以上

天和二壬戌年

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』　請求記号 卯-1

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』　請求記号 卯-1

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』　請求記号　卯-1

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『憲教類典』　請求記号　卯-1

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』　請求記号　卯-1

ガラス使用

正徳元辛卯年六月

覚

一 今度朝鮮人来聘ニ付諸大夫
以上衣冠并精好之指貫ニて
仕候

一 侍従以上 藤紫

一 四品 濃紫

一 諸大夫 浅黄

装束之儀ハ古品ニ而も不苦候向後古し
重て可相伺候以上

六月

正徳元辛卯年六月

正徳元年朝鮮人来
聘ニ付御館之内ニ

一 朝鮮人来聘ニ付御仕立之
雑掌野菜之用之 御府之

一 右御用ニ付而御用之儀
平川豊前守・織田能登守・大沢
出雲守・本田隠岐守・宗対馬守
此外ハ未席様事

正徳元辛卯年七月

朝鮮人来聘ニ付御触書

朝鮮信使府中迄来着之書簡
無之より以時下為差越候ニ付致承知
是〃ハ法ニ而箇篭笠銭ぬき候之
分相止ニ候

七月

右之通申く

正徳元辛卯年七月

朝鮮人信使江戸参着之節

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』　請求記号　卯-1

ガラス使用

一

一

一

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』　請求記号　卯-1

ガラス使用

以下新井ニ對し無禮なる事
一切ニ仕るましく候たとひ
後日ニ至り候て半兵衛すこしも
とかめ申ましき儀の旨仰付られ候
嚴しく罪科ニおこなひ申へき事
但後日彼の者共火の用心の儀相定
急度相守可申もの也
右之通可相守もの也

延享四卯年正月日　右之
佐渡守殿御内
中山出雲
新井藤兵衛

一　朝鮮人来朝ニ付而中山道江戸
表より被召連候ニ付御用ニ付
往還筋以来者相互ニ無之
両隣組ニ而火の用心掃除申付
以下ニ申渡候

一 右体之者ゟハ申来候ハゝ、此段ハ得と
承之候而其方ニ而申聞候様ニ而可相
成事ニ候
右之趣ニ而其方共諸事可申達候

延享四卯年五月十七日

伊藤出雲殿御渡

御目付

百人組

富房大八組与力

細井文三郎

太刀銘へ　御直銘之　御呆印
彫刻有之中渡ニ於御細工所
右彫候者中会見ニ候而其紙ニ有之
鍛冶林太郎次林内記ニ見候ニ
候得共御細工所ニ而替之候
ニ付有之中渡之面々も可申候

之候

延享四卯年十二月十日

加納遠江守殿江渡

御目付へ

一 来夏朝鮮人来朝ニ付東本願寺迄道

中筋ニ而火之元之儀ニ付而ハ入念候様

可被仰

築地本願寺　谷中感應寺

日本橋稲荷寺　西久保天徳寺

右四ヶ寺之儀ハ風烈之節者寺社奉行江

[illegible]相伺候様 [illegible] 火消役

被申付候ニも [illegible]

十二月

延享四丁卯年十二月廿日

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』　請求記号　卯-1

ガラス使用

寛延元戊辰年二月

釈鮮人来朝ニ付

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』　請求記号 卯-1

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』　請求記号 卯-1

ガラス使用

一 右半様ニ而も差支候用向

一 上役並中并宗對馬守ハ存寄之
事

一 平日ニ而ハ以之外も半様ニ而ハ差支
用向

一 費用之儀御答應懸之設ニ付而も
又其方ニ御答應懸之心得何
之半様也費用之儀も其而御出来
諸雑事

三月

延享五戊辰年三月令

雅楽頭殿御渡

御目付へ

朝鮮人来聘之道中毎
来人ニ而旅館ニ罷越見候者ハ
越中山五郎左衛門神尾市左衛門

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』　請求記号 卯-1

ガラス使用

延享五戊辰年三月七日

雅楽頭殿江渡

御目付江

細川越中守

一 下谷御徒町屋敷出火之節東叡山
寺中風ニ而御用ニ候ハヽ人数差出候様
小火之内ハ自分構ニ不及候

一 自分屋敷近辺之儀者人数大勢差出候
ニ付其節ハ上野江者不及出
人数之内先ツ差出し見計可申出
火之場所ニ而見計不致候而は宜
火消三組見付ニ罷在候三組之
見付ニ而差出候人数上野江参
とも屋敷ニ而可致と之儀被仰付
候様可申事

右之趣此書付朝鮮人御用ニ
付候様御目付東叡山御本坊寺
東叡山人数罷出候様申達

近

国立国会図書館 タイトル『憲教類典』 請求記号 卯-1

ガラス使用

前々之通可被仰候

三月

延享五戊辰年三月七日

雅楽頭殿御渡

松平阿波守

一 下谷御成道御茶屋敷出火之節来
形成風烈之節者町中見廻人数召連
其外小火之節ハ自法被召連出申候

一 自分屋敷前辺之人数大勢召出ニ
依之其上之者共池之端々ニ
召出候人数之内先手之
加火消之場所ニ申付相可
致ハ定火消三組申付ニ被差
召三組之者申付ニ而指図之人
数池之端ニ相成之者屋敷へ
助之者共組頭次第引取可申事

右者此節朝鮮人御用ニ付請負ニ
申付候ニ付白絲屋彦兵衛所
江人足ニ出シ候様ニ申聞可被申渡
候以上

延享五戊辰年三月七日

雅楽頭殿御渡

火消役江

一 当夏朝鮮人来朝ニ付其節朝
鮮人御在府中其内品川筋
をも定火消ゟ三組ツヽ申付
消防之儀ハ其方共ニ申付候
中尤其上無益之儀不宜火
之番より上野御本坊ニ而
人数之内ゟ召連候様ニ申付
其方共ニも三組ツヽ申付候
右人数之儀御組中ゟ申

右之通被仰出候

三月

延享五戊辰年四月晦

一朝鮮人 御本丸江
登城日西丸ゟ出御 御成之
節 御本丸ゟ御玄関通
御門之蓮池御門ゟ坂下御門城中
登城退出被遊候節ハ何も

西丸大手御門ゟ退出被遊候

一西丸ゟ出御 御成ニ付三段
御本丸退出被遊候大手御門ゟ退
出ける

但内桜田御門之方へハ不罷退

一大手御門内桜田御門西丸大手御門
散之事
下乗ゟ残供之者へ人数

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』　請求記号　卯-1

ガラス使用

延享五戊辰年四月十五日

朝鮮人往来之節見物之儀ニ付
町中江申渡覚

享保年中申渡候通、横町ニ
而見物致し候儀ハ、高キ所ニ而
見物致間敷候、二階ニ而見物之儀是又可
為無用候、中ニハ小路ニ面し候中ニ合候者二階ニ而見物致し候
見物人も店前ニ而見物いたし候様ニ可申付
并ニ桶ニ水を入、店先ニ出し置可申候、尤
桶ハ持手桶いたし、むしろ敷きより
提灯之儀ハ、中ニ而見物人有之間敷候
窓等ハ簾ニ而ふさぎ申候、尤表つ
きの見物人ハ日之内ハ可致見物すき
ニ而も見物いたし、見物人会し屏風又ハ
幕ニ而も張り候て見物可致事
但見物之儀ハ日暮ニ而ハ間敷候も
人数ニ出り候、往来小路の者
ハ其外向寄大身之者抱置

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』　請求記号　卯-1

ガラス使用

享保四年朝鮮人来朝之節
松平大和守替松平陸奥守　松平
美作守江相達置候て此段
候ハ
四月

延享五戊辰年四月十七日
雅楽頭殿御渡

御作事奉行
朝鮮人来朝御用ニ　御目付ニ
御使番
東叡山
細川越中守代り
佐竹右京大夫
浅草御蔵
松平阿波守代り
南部大膳大夫
右之通　御供ニ付先達て
越中守阿波守江相達し置候朝鮮

人ニ用不済ニ付キ　下谷浅草辺
相尋候ニ付人数有之由小者ニ申付
以紙右京大夫大膳大夫江申渡

延享五戊辰年四月廿日

朝鮮人来聘ニ付
掃除之者ハ家内ニ罷在候様可相達

覚

一　同朋以上万石以下之家来内
中間ニ至迄付候人并家来之人
面々之者傘持候之人　百姓中間
より上ハ刀持候人　面々之者ハ
手傘用ひ可申

一　万石以下家来内侍之人并
出家之人　百姓中間より上ハ内
刀持之人面々之者ハ手傘用
以来

一 万石以上以下ともに被仰出候家格に
応し御入申上度事
但御届之上向々へ被差出候
入用之事
一 中之口出之　場之内御届之
旬之前より之中之口へ出候節
支度御掛り衆

延享五戊辰年四月廿四日
雅楽頭殿御渡
御本丸
大御所様
大納言様
今度朝鮮人来朝之節諸大夫
之面々衣冠並装束太刀帯候
平服向々ヘ下土達候得共
以下之面々達之候

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』　請求記号　卯-1

ガラス使用

延享五戊辰年五月廿九日
雅楽頭殿被仰渡

大目付
御目付江

御三家之庶流
越前家
井伊掃部頭
松平肥後守
御譜代大名同嫡子
高家
雁之間詰同嫡子
御奏者番同嫡子
菊之間縁頬詰同嫡子
御本丸
西丸 詰衆並御役人
西丸布衣以上御役人

右之面々朝鮮人御礼之旨

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』　請求記号 卯-1

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』　請求記号　卯-1

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』　請求記号 卯-1

ガラス使用

延享五戊辰年六月十五日

雅楽頭殿御渡 佐竹右京大夫江

佐竹右京大夫

朝鮮人江用無之者下々迄堅可申付
見物之者人数寄合間敷旨可相触
先年来朝之節も朝鮮人着岸之
節於在所相守候通可申候

右之通

六月

延享五戊辰年六月十五日

雅楽頭殿御渡 南部大膳大夫

南部大膳大夫

朝鮮人江用無之者下々迄堅可申付
見物之者人数寄合間敷旨可

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』　請求記号 卯-1

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』　請求記号 卯-1

ガラス使用

延享五戊辰年六月十五日

雅楽頭殿江渡

出精候ニ

朝鮮人御用ニ付内藤東取遣
相勤ニ付三組同心諸詰訪之致
以後出精者共相勤候ニ付御褒美下
度之段以書付可被申渡候

六月

宝暦十二壬午年正月廿三日

松平右近将監殿江渡

一 朝鮮人来聘ニ付御用中江戸
表ニ而被召遣候組之者
結構之儀ニ而候得共
平常組之中付掃除等申付
候得共以下手当
右之者共何茂拝領被下

宝暦十四甲申年正月十六日（明和元 此年改元）

松平右近将監殿江渡

朝鮮人江ハ詩作贈答并筆談等ハ
之外如何も可有之對話之儀ハ
或懇ニ以ハ異又古来より二義
有説し疑敷所有之候
却ハ風雅以之贈答往復
可有之事ニ候得とも一向ニ学力
無自覚ニしたか其任相当り
彼是ニ而紛ニ筆談等家々ニ而紙
何をもり以紙ニ不書筆談等有之一
通信紙ニ并師匠ニ相頼候事
以林大学頭方へハ天和以来
不相替も其節詩作贈答并
ニて寄談書被為仕置候様
従中世年来之通候ハ縁し来客出
席し候とも大学頭ニ而詩作之
唱和も相成ニ而通信使心得可申達候

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』　請求記号　卯-1

ガラス使用

朝鮮人登　城之節御仕
向之儀申上候場所

一中之御門外ニ而錢を以て
侍共之儀ハ速絶御門内跪
し向ニハ御目付衆御出
おまく左之者刀持之御太
之人登　城仕る由座相座
御門内ニ而相控候

一中之御門外ニ而錢ハ百石以上
侍共ハ二而御目付衆御会釈を
立ハ其段御会釈有之候而左
速ニ刀持之候ハ之人登
城之左右ニ而相控候

一御仕之向之下二而之左手右
仕之上者家来之候ハ内桜田御門

外下馬ニ而相控候

一大手御門より御仕之向之仕共
之候ハ和田倉御門内松平肥後守

散

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』　請求記号　卯-1

ガラス使用

右之御書付ニ而見候ハ無之差遣シ候ハヽ吉
進上之儀ハ立不申御中ニ御渡シ候而
能候

宝暦十四甲申年二月十八日

一　朝鮮人宿　城之吉羅し紙
紙捻并用申候

一　朝鮮人宿　城之吉布衣以下
之通し

敷中衣服之儀無構元之通し
通用之紫衣不足候衣用申
候事
但羅紗之類ニ而并縫足袋用
候ハヽ猶更紫染不申候事
右之趣右ニ相応敷紙御守衣服
右之達候同席其外申聞
猶又又其筋達候申通候之

跡之方江移候様被仰付候旨申上

事ニ候　以上

宝暦十四申年二月十八日　大井伊勢守

小笠原伊豫守殿

松平式部大輔殿

各留守居

右之通年番之衆ニ申達書付差出写

是迄申し相成立候事ニ付申談入念候

宝暦十四甲申年二月十九日

朝鮮人之　増上寺礼ニ付来着之旨

通詞宗対馬守ゟ書付差出候写

右之趣両御役所江可相達中ニ付極撰

津守殿致承知候以御達申置

二月十九日　曲渕勝次郎

支配四之丞来

右之通書付を以申し達書付差出

是迄申し相成立是迄申候相入念候

宝暦十四甲申年二月五日

松平右近将監殿江渡

御用番写

高家衆

明後廿七日朝鮮人へ御暇被下候
ニ付る衣冠着用出仕可有之候
可被相心得候様ニ

二月廿五日

宝暦十四甲申年二月廿五日

松平右近将監殿江渡

御勘定支配奉行え

御役人

明後廿七日朝鮮人へ御暇被下候ニ
付る衣冠着用出仕可有之其段
之面々者布衣着用可被相心得
様ニ可被相達候

二月廿五日

宝暦十四甲申年二百廿

一　万石以上以下　并布衣以上ニ而役
人ニ而御目見以上見習所之
親子并諸侍之人并其人毎之
之者傘持可申候　布衣以上
之役ハ紅葉山下ニ而傘持之
之人迄ハ御目見以上無用候
以来

一　退散之節ハ紅葉山下ニ而傘持
之人并御手先并蓮池御門通
大手御門内桜田御門内御留守
退散之節

一　紅葉山下ニ而傘御目見以上ニ而
従是以下ハ人目付案内次第
ニ而傘持之者ニ而大手御門
以来

一　布衣以下ニ而役人　諸役人ヘ
出入ニ而田安御門清水御門太
三ケ所ニ而ハ御留守居より役之

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』　請求記号 卯-1

ガラス使用

宝暦十四甲申年二月

御本丸西丸
諸番頭
諸物頭
布衣以上之
諸役人

一 右来月朝鮮人曲馬
上覧ニ付見物被仰付候付罷出候
御小袖麻上下ニ而罷出候、尤先達而
被仰出候通、見物之節者
羽織ニ而勿論當日着候而茂不苦候
まらぬ羽織ニ而可着見物之節ハ
羽織袴等刻限之儀ハ大目付江目付江
可被承合候

御本丸西丸
御目見以上
小役人

一 右同断
平服御小袖麻上下ニ候

田安御門半蔵御門清水御門内
御普請中ニ付見物人有之候
右之御門〻ニ者立合見物人
並当坐諸事番人其外町役人
罷出候者有之候ハヽ制限
之節も大目付御目付立合
右之通向〻江可被達候

二月

宝暦十四甲申年三月触書

松平右近将監殿御渡

一曲馬見物之儀御停止被仰出候
御礼之節差控可被達候

天明八戊申年六月

先年ゟ之来碑之儀先格之通
時節之儀ハ追而相伺可申出候

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』　請求記号 卯-1

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』　請求記号　卯-1

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』　請求記号　卯-1

ガラス使用

卯
115
1

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』 請求記号 卯-1

ガラス使用

憲教類典

二ノ廿四 琉球人

卯
115
1

東京圖書館

門	類	函	架	號	冊
		卯		一	二五

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』 請求記号 卯-1

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』　請求記号　卯-1

ガラス使用

№1109/23

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』　請求記号　卯-1

ガラス使用

右之目録之趣令披露畢 西来君入念
御祝儀之旨忠川之 左如此被懸御噂候処
於此上茂可有満悦候 以上
寛政二年九月廿六日　松平和泉守

四　中山王復翰

寛政二庚戌年九月廿八日
御代替為御祝儀琉球国中山王使者圍
琉球国来朝書翰

大樹将軍家紹統當代御継述随永
年嘗天門寿永慶之謹遣一价使
伸恭賀之忱来朝謹奉細言説以
伏希以克大人恩教之至
尊字惟華正理不備
惟時寛安弐年壬辰五月日吉　中山王
尚穆判

松平伊豆守殿
松平和泉守殿
阿部豊後守殿

慶安二丑年十月廿日

使者来書翰披讀賀我
貴大君承継前業流治國之餘澤
至慇懃之志也太刀馬代併君祿之宜歟
累守城深謝禮平賜眼領之許賜

足下同様ニ而御文言

慶安二丑年十月廿日　阿部豊後守
忠秋判
松平伊豆守
信綱判

四書　中山王館下
右書ハ松平和泉守依病氣加判
無之

別録
白銀　五千両
綿　五百把

右ハ七色於中山主之
十月廿日
右之通箱ニ 貝桶林ノ寿安ニ申付ル
右箱長サ之事
貝箱ノ寸法覚
一長サ壱尺五寸　一横壱尺壱寸
一高サ三寸　一環根 但高蒔絵
一本桐 但白木　一結緒 但さくら打
一蓋 中らうさ

右之箱貝桶ニ入レ 浅黄羽二重服紗包ニ
同断 之覚
一長サ壱尺六寸五分　一横壱尺六寸五分
一高サ壱尺三寸　一環桐 金銀九曜
一緒 同断色茶　一本桐 白木
一蓋 中らうさ めんとりれ
一表箱紙ノ縁合 長サ壱尺三寸余
一貝桶之節 上ケ物

右書翰案寸法之事為後年ニ記置候
右元中依公儀御図記之

寛文十庚戌年五月

琉球国王書翰

謹令呈上一翰候抑去歳吾薩州
之太守光久之奉
鈞命而予嗣琉球国王之尊位因茲為
奉述賀詞使小臣金武王子附于光久
献上而聴之土宜雖微以表恭意之
旨趣可達
台聴様可預御誠惶不宣

寛文十年庚戌五月廿五日

中山王
尚貞

板倉内膳正殿
土屋但馬守殿
久世大和守殿
稲葉美濃守殿

寶永七庚寅年十一月十八日

明後十八日琉球人登　城ニ付道筋

松平薩摩守下屋敷より上屋敷迄

罷出候二組敷ニ而囲候様可被成候

十一月十七日

寶永七庚寅年十一月十八日

覚

座敷方ニ而見物之者上下共窓之間ニ差出候者

是迄對し粗相不届之儀無之様

人手桶足入念可申付候并出家横小路迄

等ハ猶更堅出し不申様ニ念入候

婦女之類も可申付置候不作法無之様

可申付候

寶永七庚寅年十一月十八日

一　琉球人松平薩摩守芝下屋敷より登

橋より内者頭方表門通通町芝口

[illegible]

寛永七庚寅年十月十七日

[illegible]

寛永七庚寅年十月十七日

[illegible]

寛永七庚寅年十月十七日

[illegible]

寛永七庚寅年十月十七日

[illegible]

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』　請求記号　卯-1

ガラス使用

越前守殿家来より和田倉御門井上
河内守殿家来へ高橋表へ大手御門を
退出之節大手御門外縁掛表へ井上
河内守殿前并八代洲河岸日比谷御門
松平安芸守殿前新橋通り屋敷迄罷越
大名小路通り通し屋敷前罷出候て見物
一 琉球人出府 登城之節御組通市
罷在候様被申達候て通り之屋敷家来罷出
出候者外通り先見物ニ相成候

一 高使和田倉橋之出来付てより迄之
一 高使退出之節大手御門之前へ付て
見迄之例
大し汲進被之出仕之通之退出被
うも成候
一 御奉行衆も中し出つ之延被致候て
之様
一 勅使御参向中之江戸御修理等相済修補
御文九年日文七ツ時済之大広間

十月廿八
寛永七庚午年之

寛永七庚午年十二月廿五日
布施以上
津役人　浅宮法眼
此度琉球人罷下候節大坂市郎兵衛
之船手付被遣候　御用可相勤候
一琉球人罷下候節松平薩摩守
国許より参り候　御用八代
渕河岸在番所人足入用之事
相勤候
十月廿七日

寛永七庚午年十二月廿七日
上使　御使　琉球人参府之節松平
薩摩守差添罷下候　城下
江戸へ八代渕　河岸在番所向出張
之節茶屋之儀与大手前より

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』　請求記号　卯-1
ガラス使用

可橋御門ゟ出護持候義御番
衆より神田橋之外御用屋敷番迄御渡
筋違橋本多信濃守番所迄直ニ
二王門ゟ取越し　御宮ゟ参詣
仕衆より文殊楼ゟ相廻候而去候
ゟ警固之者ゟ先ニ其方何之道筋
可被申候

宝永七寅年十一月廿六日

寛延元戊辰年十二月七日

松平右近将監殿江渡　御目付江

琉球人松平薩摩守召連来ル十
日江戸着之事

十一月

寛延元戊辰年十二月十六日

本多紀伊守殿
宮内少輔殿江渡

大目付
御目付江

寺社奉行

右衆中之御役人
御免之事
但出府之者町奉行佐渡奉行浦賀
奉行共
右明十二日より来廿日服紗小袖麻上下着
用可致候 以上
但此表者当日ゟ法会之日ゟ相止可申候
且又右同断書殿刑部殿御殿被仰ゟ申渡ふ
候

右之通可被相触候 御免之目付中ゟ申
其方御達置候
十二月十一日

寛延元戊辰年十二月十六日
寺社御奉行御渡 御目付江

一 来十六日琉球国中山王使者登 城之節
中ノ口番 出御以前
一 使者之節札之前献茶国見之通可申渡

通詞并付添之事

一 琉球人江戸参府之節付添通詞
大広間迄出候而諸席ニ不及候事

一 琉球人自分之御礼相済候迄
殿中ニ罷在候様縁ニ而相勤候事
右之通御年寄衆被申渡候旨日記ニ
有之候

十二月

寛延元戊辰年十二月十日

宮内少輔殿　　御目付

一 来十五日例月之御礼無之候ニ付
其旨可被相触候

十二月十日

寛延元戊辰年十二月十四日

大岡出雲守殿
本多中務大輔殿　御渡

大目付江
御目付

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』 請求記号 卯-1
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』　請求記号 卯-1

ガラス使用

一　法印法眼被仰付候節　披露
之面々江も是迄之通可相心得候　御礼
同日於西丸若年寄衆以上
御役人共御本丸御番方
西丸江も相達候様

十二月

寛延元戊辰年十二月十八日
右近将監殿　　十二月廿日

宮内少輔殿　　十二月廿日

十二月十八日　　青山因幡守

宝暦二壬申年十二月廿八日
信濃守殿　　十二月廿日

一　琉球人松平薩摩守召連来月上旬
江戸発足之筈ニ候

十二月

明和元甲申年十一月十七日
一　琉球人登　城并御暇之節
御目見之節見物罷出候ニ付　殿中席
并同末席之面々之様子者之義大目付文殿
揃候節　御沙汰ニ付可被申上候
十月　曲淵勝次郎
土屋甚五郎
右者此年付を以申し来候近年ハ右之通り之事ニ付
又ニ立尋合候中ニ御又後申上之趣候

明和元甲申年十二月
一　琉球人　御本丸江登　城ニ付
之者登　城いたし候付　御本丸より西
丸江罷越候　西丸蓮池御門下乗
御丸中ニ者不申候　城退出之節ハ
同所江出候分大手御門通退出之節ハ
一　西丸江登　城帰り西丸ニ而琉球人
御本丸より退出後大手御門通退出
候事

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』　請求記号　卯−1
ガラス使用

但内桜田御門ゟ退出之面々ハ
琉球人登城之節大手御門入候者
退出可致事

一 大手御門内桜田御門西丸大手御門
下馬ニ有之候供之者共人留之
儀ハ元ニ神田橋御門内酒井左衛門
尉屋敷続和田倉御門内同断場所
桜田御門ニ有之候者共ハ是又同断
右之者共ハ都而控所并供廻り

小笠原右京大夫屋敷前本多豊後守
屋敷跡ニ有之候是又同断ニ付候
而も退出之節屋敷前ニ而御家之方
右之場所之内ニ有之候様
御作法ニ而可申候し不残
御徒目付御小人目付之者共ニ申談
可申候是又御作法ニ付可申
候様以上

十一月

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』　請求記号　卯-1

ガラス使用

十一月　出羽播磨守
老寄申上ル

明和元甲申年十一月

琉球人参府　登城之節下乗内外
迄罷越見

一 四品以上并万石以上下乗内ニ
而供之侍壱人
諸大夫以上冠木門之内ニ而侍之人
草履取之人召連し雨降之節傘持之人
冠木門之内ニ刀持之人召連し雨降之節
ハ傘用候事
但中之口迄　御目見之者草履取
召連候事

一 万石以下ニ而者下乗内ニ而侍之人草履取之
人召連諸大夫以上冠木門之内ニ
刀持之人召連し雨降之節ハ傘用候事
但中之口迄　御目見之者草履取
召連候事

一万石以上以下共被物ハ不残横田ニ
一切入申間敷候事
但頬冠ニ而ハ被物囲ニ入り候事
一音楽之儀停止平生之通無差支候
事
十月
曲淵甲斐守
当番年寄衆
右之通書付を以被仰渡候趣達并右以書通
遣し候ニ付町中之者念入候様申通

中々之手際

寛政二庚戌年十二月四日
琉球人登城之節
一万石以上
琉球人登城之節
一万石以下下々囲傍之人并履物之人
高之節傘持之人以之外異形
来囲ヨリ囲之人ニ傘為用申間敷候事

一下乗門ニ接候番所一切入込不申候事

但中之口詰居候面々ハ接番所ヘ
入込可申事

一中之口前掛リ之面々供之者中之
口御門内ニ待合可申事

一御玄関より出掛リ之面々供之者
等腰掛ニ而其当番詰居候御門内ニ罷在
可申事

一下乗不ニ来掛リハ供之者并乗物共
中之掛リ西丸大手向寄之分
小笠原右京大夫屋敷前ニ相控
桜田向寄之分ハ内桜田下乗前ニ控
居可申事

一大手下乗不ニ来掛リハ供之者掛リ
西丸来掛リハ酒井左衛門尉屋敷前ニ控
居可申事

一内桜田下乗不ニ来掛リハ供之者
掛リニ西丸来掛リ和田倉御門内下積隙ニ

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』　請求記号 卯-1

ガラス使用

寛政二庚戌年十月

松平定信

井上周圭

高家

丁寧語用婦女

普通用婦女

菊亭香雪

布衣以上婦人

法服着用

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』　請求記号 卯-1

ガラス使用

卯
115
1

国立国会図書館　タイトル『憲教類典』　請求記号 卯-1

ガラス使用

卯
合66
1

国立国会図書館　　タイトル『憲教類典』　請求記号　卯-1

ガラス使用

ガラス使用
国立国会図書館　タイトル『憲教類典』請求記号 卯-1